

県研究主題

コミュニケーション能力の素地を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 小林 正哉 教諭 (中地区)

< 研究主題 >

学級担任と子ども達がともに楽しめる外国語活動を目指して

1 提案内容

学級担任が子ども達とともに活動を楽しめる「外国語活動」の授業づくりの実践。

まだ「外国語活動」に戸惑いや不安をもっている学級担任が多い。しかし、担任が戸惑いや不安から負担を感じてしまっているのは、子どもにとって楽しい授業をつくっていくことはできない。こうした中、教師が無理をせず、子どもとともに楽しめる授業づくりの実践と教材・教具の工夫を行った。

(1) 実践内容

① 学級担任が行う

担任は子どもにとっての英語のモデルではなく、英語を使おうとする学習者としてのモデルである。担任自ら英語に親しもうとする姿勢が、子どもの外国語に対する興味・関心を高めるきっかけとなる。

② 「聞く活動」を重視する

「英語を聞く」活動を重視し、相手が言っていることを推測しながら理解しようとする態度をはぐくんでいく。単なる音のやりとりではなく、必然性のある場面を設定し、意味のあるメッセージを繰り返し聞かせる。

③ 「知りたい、伝えたい」という思いを大切にす

言葉よりも先に「分かってほしい」「分かっている」という思いがあり、その気持ちを伝えるために言葉がある。この点を考慮しながら、子どもの伝え合おうとする意欲を高めるような教材を用意する。

④ 英語の歌で、英語特有のリズムや発音に親しむ

英語の歌を歌うことで、カタカナ英語とは違う英語本来の発音・リズムに親しむことができる。高学年になると英語の歌は恥ずかしがって歌おうとしない子どもも少なくないが、無理に声に出させるのではなく「繰り返し聞かせる」ということを重視して行う。繰り返し聞かせることで、子ども達は発音やリズムに慣れ親しむことができ、自然と声が出てくる。

2 協議内容 (質疑概要)

Q : 実践内容②～単なる音のやりとりではなく、意味のある英語のやりとりが必要とあるが、はじめは意味のない英語のやりとりでも、練習することで英語に慣れてくるということもあるのではないか？

A : 子どもが発している言葉と受け答えの場面で意味と言葉が一致しないとスキルの習得になってしまう。小学校の外国語活動のねらいとずれてしまう。

感想 1 : 先生と子どものやりとりの後に、子ども同士のやりとりを取り入れたほうがよい。やり取りのモデルを見て子ども自身が自分もやってみよう、という必然性が生まれるのでは

ないか。

感想2：授業の最後に振り返りの時間を取ることが必要である。子ども同士の感想を述べ合う場面を作ったり、子どもの感想に教師が言葉をかけたりするなどフィードバックがあるとよい。教師が授業のねらいについて言葉がけをすることで、次時の授業から、子どもの意識に変容が見られるのではないか。

3 まとめ

- ・教師が「とりあえずやってみよう」「子ども達と一緒に活動を楽しもう」という気持ちで外国語活動に取り組むことで授業の方向性が見え、加えて実践を重ねることにより、外国語活動の良さや大切さを実感することができた。
- ・小学校での外国語活動は中学校での英語教育への基盤となるものである。英語の音に慣れ親しませながら、「言語は覚えるものではなく使うものである」という実感をもたせて中学校につなげていく。小中連携を意識していく上で、小学校での外国語活動の考え方を中学校に伝えて連携を図っていく必要がある。
- ・授業中に、教師が子ども一人ひとりの様子をすべて観察することは難しく、見取りによる評価については、今後も研究の必要がある。

4 助言

県内各地区で様々な取組が行われている。ALTと担任の関わり方の違いなどがある中、担任が行う授業に関して各地区で独自にカリキュラムなどの冊子が出ている。だが、外国語活動の授業は指導案などで文字だけみても再現ができるものではない。様々な授業を実際に見たり自分で実践してみたりしなければ授業に面白味がでない。そして、実際に自分で外国語活動の授業を組み立ててみると自分がいかに余分な言葉を他の授業でも発していたかに気づくことができる。外国語で先生が発した言葉に対し、子どもは何を言っているかわからなくても、状況を判断し理解しようとしたり推測したりして集中して聞いてくる。このように言葉はわからなくても相手のことを理解しようとする姿勢がコミュニケーションにつながっている。逆にアクティビティなどの説明に日本語を使えば使うほど子どもは集中しなくなる傾向がある。今後、担任のみで行う45分の授業のマネジメントをどのようにしていくかが課題である。またカリキュラムマネジメントでは、小中連携の観点から小学校の外国語活動が中学校までつながるものとして考えなければならない。

提案2

提案者 岡山 悦子 教諭（相模原地区）

<研究主題>

コミュニケーション力を育てる授業づくり
～デジタル教材の効果的な活用方法をさぐる～

1 提案内容

(1) 本校（相模原市立相模台小学校）が考えるコミュニケーション力

- ・意欲（学習の原動力）・・・学ぶ喜び、つながる喜び、伝わる喜びなど。
- ・スキル（技術）・・・アイコンタクト、聞く態度、マナー、話し方など。
- ・表現力（考えて伝える）・・・相手意識、行動する力など。

① コミュニケーション力を育てるために気を付けていること

・アクティビティにおける必然性

子どもたちが自ら相手と「関わりたい」「伝えたい」と思うようなしかけづくりを意識している。活動の中に教師側のねらいや目標があり、子どもたちが人と関わることを楽しめる活動を意識している。

・学級担任とALTの役割・連携の重要性

学級担任は、クラスの実態を知っている。授業のコントロールができる。大人数をまとめる活動ができる。保護者とのつながりなどの役割をもっている。ALTは外国の文化や発音に詳しく、アドバイスの方法など外国語活動への意欲を高める役割をもっている。両者がT1という気持ちで授業を進めることが重要である。

(2) 授業実践

① 評価について

・「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に関する気付き」の3観点を、授業の中でバランスよくみることが大切である。

② 授業の流れについて

・挨拶→前時の復習→本時の会話文、単語→活動→ふりかえり→あいさつ
・デジタル教材を活用することで、大型テレビと子どもたち一人ひとりの学習になってしまうことが多くなってしまった。子ども同士の関わりを持たせるために、グループ活動等を取り入れ、友だちと協力する楽しさや人と関わる楽しさをもてるように工夫することで、コミュニケーション力が育つと考えている。

(3) 成果と課題

約9割の児童が外国語活動を楽しんでいると感じており、普段の授業では活躍できない子どもも新たな力を発揮できる授業となっている。授業作りや教材作りは時間的負担が大きく、担当学年だけに任せるのではなく、学校全体で取り組む体制が必要である。また、子どもたちが自ら取り組みたいと思えるしかけ作りを考えていくことが、今後の課題である。

2 協議内容(参加者と提案者との質疑応答形式で進行)

(1) 目標は一つだが、評価観点が二つあるのはなぜか。

・目標は一つだが、授業の内容により、関係する評価がある場合は、複数の観点での評価することが必要となることがある。

(2) 振り返りシートは毎回書いているのか。また内容は目的とリンクしているのか。

・目標に合わせた観点で毎回行っている。教師側の観点と子どものアンケート内容が少し違うこともあるが、基本的にはリンクしている。ALTがいる時間をより有効に使う為にも、どの時間でアンケートを実施するかは課題である。

(3) 子どもが英語を話したいという必然性は、どのようにもたせているのか。

・普段からの慣れ親しみが重要。例えば、職業について取り扱う場合、どの職業を選択するかは、教師ではなく、子どもたちの意見を考慮して取り上げている。
・「ALTに話し掛けるから英語を使うという必然性もある」との意見もあった。

(4) HRT、ALTの役割はどのように決め、何に重きをおいているのか。

・授業の前に、必ずALTとの打合せをしている。指導案を見ながら、それぞれの特徴をいかした役割分担をする中で、それぞれの動きを確認している。

(5) 外国語活動で育った力が、普段の生活の中でいかされた場面があれば教えてほしい。

- ・外国籍児童の多くは、日本語が上手に話せなかったり、他の教科で活躍する場面が少なかったりしていた。発音の手本を示してもらったりなど、外国籍児童も活躍できるように授業を組み立てている。外国語活動は、他の教科ではなかなか活躍することができない子でも認められる場となり、よりよい人間関係を作りだすきっかけとなっている。

3 助言

(1) コミュニケーション力について

- ・各校でコミュニケーション力をどのように捉えるか。どのような姿がコミュニケーションを取っているかと判断するかを考える必要がある。

(2) H R TとA L Tの役割について

- ・H R Tは小学校教育のプロ、A L Tは英語教育のプロである。小学校の外国語活動で必要なものをしっかりと判断することが大切。その為にもコミュニケーション力をどう考えているかが重要となってくる。

(3) デジタル教材について

- ・デジタル教材は便利で有効なものではあるが、大切なことは子どもと授業すること。教師も子どもも、デジタル教材とコミュニケーションするのではなく、活用してほしい。

4 協議の柱に即した協議

「外国語活動における授業の課題と今後の方向性について」

(1) 授業づくり

- ・子どもが自ら学ぶ意欲をつける授業づくりが必要。
- ・授業・活動に必然性をもたせる必要がある。子どもからわき上がってきたものを受けとめ授業に組み入れる。
- ・子どもに外国語を学ぶ必要性（自主性）を感じさせ、自ら学ぶ意欲をもたせる。現状では指導者側が教材などをすべて用意し、授業に用いる表現・単語も指導者側が決めているが、子どもが学びたいことや知りたい表現・知りたい言葉・物の単語を授業に用いることも必要なのではないか。

(2) コミュニケーション能力とは

- ・子どもたちにつけさせたい力は何か学校として考え、コミュニケーション能力を定義する。
- ・どのような姿があればコミュニケーション能力がついているとみるかを定義する。

(3) 小中連携

- ・小学校の外国語活動のねらいを中・高にもっと知り、理解してもらう機会を設ける。（授業交流・意見交換など）
- ・中学校の英語教育にどのようにつなげていくかということを考える。

5 まとめ

- ・評価は子どもたちを序列化するものでなく、評価によって子どもたちの成長を促すものである。外国語活動では、子どもたちの頑張り、努力、成果を積極的に評価していく。
- ・すべての教科で児童のコミュニケーション能力をはぐくむ必要がある。そうした中、外国語活動として、どのような子どもを育てていきたいかを明確にしなが、どのような活動をするべきかを考えることが重要である。